

保育園と大学との連携による子育て支援
——ラーン・アンド・トークの実践報告——

甲斐 弘美・野津山 希

福山大学こころの健康相談室紀要 第6号 別刷

2012年3月

保育園と大学との連携による子育て支援¹

——ラン・アンド・トークの実践報告——

甲斐弘美²

野津山 希

福山大学大学院人間科学研究科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：子育て支援，社会連携，子育て支援サークル

はじめに

産業構造の変化と都市化の進行の中で、家族の形態、ライフスタイルのあり方や男女の役割が変化し、子どもをもつ（生命を継承していく）ことの意味や、子育ての様式が大きく変化してきた。特に、1980年代からは、働く女性の増大、特に若い世代の労働率が上昇してきた一方で、仕事と子育てを両立できる環境が十分整っていなかったことが晩婚化や晩産化、非婚化につながり、ひいては少子化をまねく結果となった。こうした中で、2004年「子ども、子育て応援プラン」が策定され、2008年には、5つの安心プラン「未来を担う子どもを守り育てる社会」の施策が打ち出された。しかし、少子化は一向に歯止めがかからず、合計特殊出生率は上昇の兆しを見せていない。

子どもを持つ親にとって、子どもを育てることは基本的なことであり、普通の暮らしの中であたり前の営みとして行われてきた。にもかかわらず、現代社会の中では以前にも増して難しく、「子育てが楽しく思えない」「辛い」と訴える親も少なくない。育児がなぜこんなにも難しくなってしまったのか。その背景には、核家族化や家族の小規模化、シングルでの子育ての増加、地域との結びつきの希薄化など、子育てを取り巻く環境の変化が、親や子育て家庭のさらなる孤立化と密室での子育てを助長し、子どもと一体化する環境の中で育児に息詰まり虐待を引き起こすケースにつながると報告されている（大豆生田，2008）。さらに、このような状況は、子どもの発達上でも初語の遅れなど言葉の習得過程に影響するといった問題を引き起こすといったことが指摘されている（門脇，1999）。

このような現状を踏まえ、子育てに対する取り組みが国や地域を挙げて様々展開されている。例えば、保育所、幼稚園、地域子育てセンター、役所や保健所、子ども家庭センター、病院、つどいの広場、子育てサロン、療育機関、児童館、学童保育、プレーパークなど、上げれば切がないほどたくさんの支援活動が展開されているが、保育園や地域子育て支援センターが中心となって乳幼児をもつ母親が集い情報交換をしたり、子どもの好きな遊びを学んだり、場の提供としての開放事業が一般的である。一方、ボランティアによる支援もあり、内容は子どもの遊び中心ではあるが、行政主導の「やってもらおう」子育て支援ではなく子育ての当事者（親）が助け合い支え合っている活動もある（小林，2010）。近年、父親支援プログラムも盛んに行われている。父親が子育てに対する意識を高め合い、父親であることを楽しむための応援プログラムで社会をデザインしていくための取り組みとして、父親支援の取り組みが大きな脚光を浴びている（青野，2009）。

このように、多様な支援は行われているが、従来子育て支援は、保育園や行政の子育てサークルや子育て支援センターが主体となり、主に地域の母親と子どもの受け皿となり、子どもを遊ばせながら親が情報交換するというタイプが多かった。これらは、子育ての負担感の解消、仲間づくり等といった側面ではある程度の効果をあげ

¹ 本研究は、平成 19～23 年度私立大学社会連携研究推進事業（文部科学省／私立大学学術高度化推進事業）プロジェクト 3「こころづくり 地域の心の健康作りに関する実践的研究」の一環として行われた。

² T 保育園園長

ていると思われる。しかし、近年は高学歴化にともない、子どもを育てる親の知識や社会経験も非常に高く豊富なものとなりつつある。そのような環境を経て親となった人々は、子育て支援にもより専門的な内容を求めるようになってきている。また、子どもの発達上の困難に出会う親も増加しており、発達相談のニーズも高まっている。子どもとできる楽しいあそびやスキンシップの取り方はもちろんのこと、子どもの体や心の発達など、身体的・心理的側面に関する専門的な知識にも興味を持ち、知りたいと思っている。しかし、現代の若い親たちは、知識は豊富であっても、子どもと触れあった経験が少ないまま親になることが多い(佐々木, 2007)。そこで、これからの子育て支援には、女性と男性の区別なく、親になるにふさわしいパーソナリティとして、養護性や親準備性を育成することも求められるであろう。さらに、“イクメン”という言葉が生まれ、男性の子育ても活発化していることから、男性を視野にいたした子育て支援も必要となっている。

柏木(1995)は、子育ては「親を育て、親の視野を広げる」と述べている。すなわち、「育児」は「育自」でもあり、ともに育ち合う子育ての場ではわが子から他の子どもへと視野が広がっていく。そのように親が育っていくような子育て支援が望まれるとされている。広い視野に立って、子育て支援の本質や目的を問いながら展開していくことが重要で、子育てのニーズの多様化や子育てへの負担感の増大や育児不安への対応、家庭の諸問題へのサポートも含めて専門家を巻き込む視点は大変重要である。

そこで、保育士・看護師・栄養士など保育のプロフェッショナルと、大学教授や臨床発達心理士など、発達・心理・男女共同参画に関する専門知識を有するスタッフ同士が連携しあい、双方の特性を生かしながら、子育て支援施設・地域交流施設としての環境を整え、プランニングと実践を行うことで、現代の親達の様々なニーズに対応できるのではないかと考えた。

福山大学の社会連携推進センターは、地方自治体、学校、各種機関・団体、地域産業などとの連携により、地域の活性化に資する実用性の高い萌芽的研究の推進と「健全なこころとからだに支えられたまちづくり」を目的として設立されており、現代の子育て家庭のニーズを十分に満たしている場であるといえる。企画したラーン・アンド・トークについては、保育園と大学のリソースを提供しあい、「ラーン＝学び」と「トーク＝語らい」を盛り込んだ新しい形での子育て支援プログラムを考案して実施することであった。この名称には「その場に訪れた人と人が語り合う中で、子育てが楽しくなるようなアイデアや息抜きできるコツを学ぶ」という意味が込められている。そのような場で専門家も交え多様な人と出会い、コミュニケーションをとることで、育児の負担軽減をはかるとともに、親子の生活経験の幅を広げ、親子関係・人間関係を促進することができるのではないかとと思われる。本稿は、専門家が協力し合うことで、幅広い知識と経験を生かし、親の気持ちを理解しつつ、ニーズを満たしていくことを目的としたラーン・アンド・トークの取り組みについて報告し、地域の子育て支援の課題と展望を明らかにしようとするものである。

ラーン・アンド・トークの活動内容

目的

子どもを遊ばせながら母親同士が情報交換をしたり、専門的な内容の育児相談をはじめ、親たち自身の生き方や働き方、男女共同の子育てのアイデアやヒントを得られるような、新しい形の子育て支援プログラムを考案し実施する。

実施方法

福山大学社会連携事業の一環として、福山大学子育てステーション行った。T保育園の保育士、看護師、栄養士、園長(第一著者)、及び福山大学心理学科教員、臨床発達心理士が協力してプログラムを考案し、T保育園の子育てサークルのスタッフが中心となってプログラムを運営した。“楽しくおしゃべりをしながら学ぶ”をテーマに、会のネームを「ラーン・アンド・トーク」とした。駅に近いロケーションであることを考慮し、買い物

などで出かけた際に立ち寄りやすいよう、毎月第三土曜日に行った（2010年度以降は午前、それ以前は午後）。

募集方法

T 保育園の情報通信紙「子育てのわっかひろげよう」及びメール配信。ひろしまこども夢財団協力のメール配信、福山大学心理学科HP など。

対象者

福山市内に住む未就園児とその家族（母親 68 名，子ども 71 名）。本事業の趣旨を説明して参加してもらった。

実施日と回数

2009年5月～2011年3月の計17回であった。表1に詳細を示す。

プログラムと参加者数

表1 各回の内容と参加者数

イベント名	父親	母親	子ども	学生	その他
第1回 5月16日：コーナーあそび・園長の子育て相談	0	6	5	0	0
第2回 6月20日：大学教授による子育て相談・新聞紙あそび	0	0	0	0	0
第3回 9月19日：ふれあい遊び・大学教授・看護師の保健相談	0	2	2	0	0
第4回 10月17日：新聞紙あそび	0	0	0	0	0
第5回 11月21日：プチフェスティバル，食育・健康相談	1	7	8	0	2
第6回 12月19日：ママのためのハンドトリートメント講座 絵本のある子育てについての座談会	0	3	3	0	0
第7回 2月20日：紙コップで人形作り	0	3	3	0	0
第8回 4月17日：ふれあい遊び・臨床発達心理士の子育て相談	0	3	3	0	0
第9回 5月8日：手作りおもちゃづくり	1	5	5	0	0
第10回 6月19日：ベビーマッサージ第1回目	0	5	5	6	0
第11回 8月21日：ベビーマッサージ第2回目	1	3	4	5	0
第12回 9月18日：ベビーマッサージ第3回目	0	4	4	5	0
第13回 10月16日：新聞紙あそび	0	3	3	0	0
第14回 11月20日：ママのためのハンドトリートメント講座	0	6	6	0	0
第15回 12月18日：ママのためのセルフリフレクソロジー講座	0	9	10	0	0
第16回 1月15日：布おもちゃで遊ぼう・大学教授の子育て相談	0	1	1	0	0
第17回 3月19日：ドキドキアニマルタワーづくり	0	8	9	0	0
合計	3	68	71	16	2

各回の内容

第1回 コーナーあそび・園長の子育て相談 母親6名，子ども5名が参加した。園長と保育士，教授や福大スタッフが参加した。第一回目であるため，まずはこのような場所があることを知ってもらおうというねらいを元に，室内でおもちゃで自由あそびを楽しみ，大人も子どもも雰囲気慣れてきたところで，母親たちは，園長・教授とともに子育てについてのトークを行うという計画を立てた。はじめは緊張した面持ちではあったが，お茶を飲みながら座談会形式で進めたので，次第に笑顔や笑い声が生まれ，和やかに時間が過ぎていった。子どもたちは，母親から離れても，同じ室内にいたので落ち着いて過ごす事ができていた。母親達からは，終了後に，先に一緒に遊んだことで子どもとスムーズに離れられたので，落ち着いて話ができたとし，充実した時間が過ごせたという声が聞かれた。

第2回 新聞紙あそび・大学教授による子育て相談 この日の参加者は0名であったため、今後の活動内容や宣伝方法を具体的に練ってしかけていかなくてはいけないという話し合いをした。また、大学生の参加を促していく方法についても、大学教授を交えて話を行った。

第3回 ふれあい遊び・大学教授・看護師の保健相談 母親2名、子ども2名が参加した。始まって間もないうちに子どもが2人とも午睡をしたため、大人同士で自己紹介やふれあいあそびを行った。やはり大人だけなので、なかなか心がほぐれない様子が見られたり、一人の子どもが起きて授乳タイムに入ったため、しばらくの間自由あそびに切り替えたり、ぬいぐるみを使い、家庭でもできるベビーマッサージを行った。子どもたちが2人とも目覚めたのち、お茶を飲みながらトークの場を設けると、そこからようやく緊張がとけ、大学教授や看護師との会話もフランクに弾んだように思う。

第4回 新聞紙あそび 残念なことに参加者が0名だった。外に向けてのアピールになるよう窓への飾り作りや、あたたかい印象になるような壁面の飾りを製作した。また、室内の様子を写真にとり、チラシに載せることで、来館者にイメージや親しみを持ってもらいやすいのではないかと話し合いを行い、写真撮影を行った。

第5回 プチフェスティバル、食育・健康相談 父親1名、母親7名、子ども8名、その他2名(叔母)が参加した。参加者増員と子育てステーションの宣伝を目的として、遊びあり食事ありの大きなイベントを行う計画を立て、「おやこのおまつり プチフェスティバル」を行った。始まる40分前には、福山駅周辺にチラシを配布しに行くことと早速効果があり、チラシを受け取った方が何組か参加した。その後も、園児・サークル会員などが多く集まり、これまででもっとも多い参加者が集まった。素朴でおいしいおやつ体験と、身近な素材を使った遊び体験をしてもらうことをねらいとし、保育園の給食室でおやつを3種類作り、魚釣り・ボーリング・輪投げのあそびコーナーも用意した。入り口でチケットと交換で好きなあそびを楽しみ、好きなおやつを食べられるという流れで行った。栄養士と数名の保育士にも協力を要請し、良いイベントとなった。一通りのあそびを楽しんだ後は、園長進行による「きずなをはぐくみ親と子のふれあい～スキンシップの大切さ～」のトークを行った。この回で、初めてトーク用のテーマに基づいた冊子を作成した。親同士の会話ははずみ、その間子どもはスタッフとともに、おやつを食べ自由あそびを楽しんだ。終了後は「子どもをそばで安全に遊ばせながら、お母さんは自分のことをできる(おしゃべりをしたり、何かを作ったり、何かを食べたり)」という場所や、「土曜日や休日に思い切り遊べて寒くない場所がほしかった」という感想をきくことができた。

第6回 ママのためのハンドトリートメント講座・絵本のある子育てについての座談会 母親3名、子ども3名が参加した。前回のイベントで子育てステーションを気に入ってきて下さった方、T保育園の子育て支援サークルによく参加している親子(家が隣の隣である)、第一土曜日のサタデー・パパの日に毎回来ている親子など、第5回目を経て、一気に輪が広がった。第6回目は毎日家庭で子育てを頑張る母親たちのためにホッと一息ついてリラックスしてもらうことを目的とし、心とからだをほぐす効果のあるハンドトリートメントの計画を立てた。また、自分で自分の手をマッサージするのではなく、2人1組でペアになってお互いにハンドマッサージをし合うことによって、癒しの相乗効果も現れ、心の距離も縮まり、次第に心がほぐれて会話ははずんでいった。ハンドマッサージをしながら、ベビーマッサージの手技を取り入れ、子どもへのマッサージワンプointアドバイスも取り入れた。「いつも家では子どもと二人きりで、自分の時間を持ってないけど、今回はとても久しぶりにリラックスして、子どもと離れて自分の時間を持てたので、とても幸せな気分」、「また子育てをがんばれそうだ」という声が聞けた。ハンドマッサージ後は、給食室で用意したおやつを食べながら、「絵本のあるくらしと子育て」をテーマにトークを行った。おやつの焼き芋はおいしいと評判で、子どもたちもきれいに完食した。資料を元に、家での絵本を読むときのエピソードや、意見交流を行った。また、この回は、子育て経験のある保育士も参加しており、就学後の読書的话题を提供してもらい、今は乳児期である子どもたちが児童期になった時に向けての見通しを持てるようにした。最後に、園からおすすめ絵本をたくさん持っていったので、紹介したり、実際に手にとって中身を読んだりしながら、会話ははずんだ。しめくりに、みんなの多数決で一番リ

クエストが多かった絵本を1冊読み聞かせをして終了した。

第7回 紙コップで人形作り 母親3名、子ども3名が参加した。紙コップやテープ、画用紙を使って簡単にできる手作りおもちゃを作った。みんなで会話を楽しみながら作業をし、おもちゃが完成した後、親子リズムやヨガをして、おやつを食べて終了。半分以上が常連の親子で、初めて参加した1組の親子はサークルに来ている親子が誘い合っただけの参加だった。また少し、輪の広がりを感じることができた。

第8回 ふれあい遊び・臨床発達心理士の子育て相談 母親3名、子ども3名が参加した。冊子特集「子どもとのいい関係～子どもへのダメの伝え方・しからずに子どもが納得する方法で～」を資料として準備した。難しい文献よりも、有名な人や身近な人の対談形式・体験談の方が読みやすいかと思いき、そのようなものを選んだ。臨床発達心理士の専門的知識もとりいれながら中身の濃い座談会となった。ふれあい遊びでは、人数が少ないためおとなしい雰囲気の中ではあったが、のんびりゆっくり遊ぶことができたが、もう少し中身を膨らまして1～2個あそびを増やしても良かったのではないと思われる。おやつの小麦粉と黒砂糖のおやきがとても好評で、子どもたちもよく食べていた。「シンプルな材料なのにこんなにおいしいので驚いた、作ってみよう」と口ぐちの参加者が言っていた。「もちもちした食感も噛み応えがあるのでごや歯にも良いので参考にしたい」という声もあった。

第9回 手作りおもちゃ作り 父親1名、母親5名、子ども5名が参加した。ようやく参加者が定着してきた感じであった。受付を済ませた人からひも通しを作ったり自由に遊んだりして過ごしたが、ひも通し作りは1組しか行わず、他の親子はずっと遊びに夢中だった。家ではなかなか作る機会がないので、子育てステーションで作って、家で遊んでもらうねらいで行ったが、参加者のニーズに沿っていなかったのかもしれない。片付けをした後触れ合いあそびをした。(ゆ～ら、ぴったんば、きゅうり、みかん、海、貨物列車など)その後、おやつを食べながら、「からだであそぼ！」についての冊子を参考にしながら意見交流をした。おやつの甘夏ゼリーは「この季節にぴったりで、自然な甘さとすっぱさがおいしい」と好評であった。前回のホットケーキのレシピ同様、知りたがっていた参加者が多かった。

第10回 ベビーマッサージ第1回目 母親5名、子ども5名、学生6名が参加した。ベビーマッサージの効果として、撫でるといふやさしい刺激が自律神経系の調整に働きかけ、内臓の働きを活発にし、さらに消化吸収、心身の成長を促進し、免疫力を高めることが指摘されている。また、親と子の心の距離を縮めることもできる。この回は、ロコミで子育てステーションのうわさを聞いたという新規の参加者が多く、ベビーマッサージに対する親達の興味・関心の高さを伺えた。冊子の手順にそって、ふれあい遊びや歌を織り交ぜながら進め、主に足のマッサージを中心に行った。終了後はマッサージ効果で体があたたまったのと疲れからか、多くの子が眠っていた。オイルを使用せずに、圧をかけずやさしくなでる程度のマッサージで行ったため、「ゆっくり手を動かすこと」「圧をかけずに触れる程度」と何度も伝えたが、子どもたちの集中をとぎらせないようにすることとマッサージに必死になりやや力が入った様子だった。また、男子大学生のボランティアは小さい子どもとかかわる機会がほとんどないということで、緊張した様子で参加していた。

第11回 ベビーマッサージ第2回目 父親1名、母親3名、子ども4名、学生5名が参加した。レッスン2で前回の続きだったこともあり、前回参加してくれた親子が2組、今回も参加した。もう1組は、「どんなところか見たい」ということで、父親と一緒に参加していた。マッサージは、月齢の低い子どもたちに合わせて10～15分ほどの工程で終えるものを実践した。前回参加していた学生も来ていたが、今回は少し緊張がほぐれ、一緒に遊ぶ姿も少しずつ見られるようになった。

第12回 ベビーマッサージ第3回目 母親4名、子ども4名、学生5名が参加した。様々な月齢の子どもたちが集まっていたため、「あんな頃もあったよね」「数ヵ月後にはこんなに動けるようになるんですね、こんなこともできるようになるんですね」という話題で、親同士が意見交流をする場面があった。子ども同士も一緒に遊ぶ中で刺激を受けたようである。子育てステーションの部屋の広さや雰囲気が、ベビーマッサージに合っている

ため、今後も親子でスキンシップできる機会をつくればよいと感じられた。

第13回 新聞紙あそび 母親3名、子ども3名が参加した。たくさんの新聞紙を使い、散らかることを気にせずダイナミックにあそぶことをねらって計画した。月齢が小さい子どもは新聞紙の感触や、がさがさという音を楽しみ、歩行が確立している大きい子どもはハンドルを作って車に見立ててからだを動かす遊びを楽しんだ。

第14回 ママのためのハンドトリートメント講座 母親6名、子ども6名が参加した。寒い時期になってきたので、第六回で好評だったハンドトリートメントを再び行った。「自分の時間をゆっくり持てて良かった」、「リラックスできた」、「親から離れて遊ぶ子どもの姿を客観的に見ることにより、子どもの新たな姿を発見することもできた」という感想が聞かれた。

第15回 ママのためのセルフリフレクソロジー講座 母親9名、子ども10名が参加した。第14回に引き続き、リラックスすることを目的とし、セルフ・リフレクソロジーを行った。リラックスできることやマッサージの人気は常に高く、終了後は足が温かくなったと好評だった。セルフだったため母親が自分のペースで行えたことはよかったが、子どもを見ながらできたこと、子どもに目がいってリフレがほとんどできない人と半々であり、それぞれの子育てスタイルを垣間見ることができた。リフレの後は、保育士による人形劇を親子で鑑賞し、親も子ども楽しいひとときを過ごした。

第16回 布おもちゃで遊ぼう・大学教授の子育て相談 母親1名、子ども1名が参加した。雪のふる寒い日だったため、参加者が少なく1家庭だった。布おもちゃは好評で、よくあそんでいた。親子体操や絵本読み聞かせも行った。人数が多ければもっとあそびがふくらんだであろうという点が残念だった。

第17回 ドキドキアニマルタワーづくり 母親8名、子ども9名が参加した。家庭でも親子で簡単に実践できる製作を体験してもらうことを目的とし、紙皿に動物など好きな絵を書き、重ねてあそびドキドキアニマルタワーを作った。子どもが製作を楽しんでいたことはもちろん、親が非常に集中して楽しんでた。作ったあとにその場ですぐ遊べるという点もよかったという感想をきくことができた。

プログラムに全体対する感想

「いつも家では子どもと二人きりで、自分の時間を持ってないけど、今回はとても久しぶりにリラックスして、子どもと離れて自分の時間を持てたので、とても幸せな気分」、「また子育てをがんばれそうだ」「子どもをそばで安全に遊ばせながら、お母さんは自分のことをできる（おしゃべりをしたり、何かを作ったり、何かを食べたり）」という場所や、土曜日や休日に思い切り遊べ、寒くない場所がほしかった」という感想を聞くことができた。また、「違う視点から守ってくれたりして参考になる」「子どもを育てながら親も成長すると聞いて、これからは成長させてくれるんだって気持ちで育てていこうと思いました。」という声も聞かれた。

考察

子育て支援をする中で必要とされることとして、子どもが育つ環境、親子関係、職場等、様々な状況の中で「誰がどこで、誰に子育て支援をするのか」を考える必要がある(小林,2006)。本プログラムの目的は、専門家が協力し合うことで、幅広い知識と経験を生かし、親の気持ちを理解しつつ、ニーズを満たしていくことであった。

参加者の推移を検証したところ、第5回、13～17回は比較的多かった。これらの回は、親子共に家庭ではできないことを楽しんだり、リラックスできる体験内容に参加が多く、専門家への相談の回は少なかったが、座談会にも専門家がコーディネーターとして加わり、特別に相談にはのらなくても、自然な会話の中でアドバイスをしたり、会話が促進できるよう努めた。その結果、参加者に行ったアンケートには、座談会でコミュニケーションすることで、「気持ちが楽になった」「会話が弾んだ」との意見が多く見られ、このことから、専門家の幅広い知識や経験を生かして、質の高い支援を提供していくことで、子どもへの愛情や成長をよるこぶ気持ちを他者

と共感しあい、人に対する信頼感を深めるというメリットが、より明確になった。

「ラーン＝学び」と「トーク＝話す」に主眼をおいたこの実践の中では、子どもから学ぶ、教わることも多くある。子ども達のもつ豊かさを多くの大人で分かち合うことで、子育てがたのしい、わが子が一層いとおしく、他者と育児を通じた喜びの分かち合いとなっているといえる。また、継続していくことで、時代や社会の変化とともに希薄化した人間関係を取り戻していけるのではないかと考察する。核家族のきょうだいが少ない環境で育ち、子どもと接触する機会が少ない学生にとっても、赤ちゃんを身近に見たり触れたり、父母の話を書く中で、子どもを中心にすえ、今の子育て環境やシステムを考えたり、自身の感性や判断力も培われ、一人に人間として自分を見つめ、親準備性を身につける機会にもなっていくのではないだろうか。

大豆生田(2011)は、子育ての責任は家庭、とりわけ母親一人の肩にのしかかっている現状があるとし、それが現代の大きな子育ての問題でもあると指摘している。すなわち、社会の支えがあってこそ家庭も子育ての責任を果たしていけることができる。そのために子育ての社会化を進めていくことが求められる。その新たなつながりとして、保育園と大学関係者、資格をもつ人材、学生世代やシニア世代といった様々な分野、世代が親子にかかわり支援として新たな展開をしていくことが求められているのではないかと。平山(2009)は、プロによる適度なサポートに支えられた子育てグループづくりは有効であると述べている。

そのような多様なニーズに応えるため、青野(2010)は、若者や中高年、様々な専門家を含めた支援システムを構築し、子育ての知識や知恵はもちろんのこと、育児文化として世代を超えて継承していく必要があるのではないかと指摘しており、異世代交流の視点を提案している。その他にも、保育施設内のみですればよいということだけでなく、家庭や地域での生活も含めて、トータルな子どもの生活が充実したものになるようにすることが望まれている(森上,2008)。

今後は、人数を増やし、より専門的な知識や情報を発信していきながら、特に異世代交流に重点を置き、様々な分野、世代が関わり異世代をつなぐ子育てプログラムを提案していきたい。祖父母世代や学生の連携協力により、参加者や異世代の意見やパワーを最大限活用し、世代を超えて結びつきを深め、社会貢献の場の拠点とし、より豊かな地域社会づくりに向けてネットワーク作りを広げていくことと子育てしやすい社会へ向けての活性化を促していくことを目指す。

引用文献

- 青野篤子(2009)。「男性の子育て」支援の現状と課題 福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 9-14.
- 青野篤子(2010)。「男性の子育て」支援プログラムの実践的研究 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 19-26.
- 伊志嶺美津子(2005). 平成16年度厚生労働科学研究報告書 子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究
- 大豆生田啓友(2011). よくわかる子育て支援・家族援助論〔第2版〕ミネルヴァ書房 pp. 4-5.
- 柏木恵子(1995)。「親の発達心理学」岩波書店
- 門脇厚司(1999)。「子どもの社会力」岩波新書
- 小林恵子(2008)。「静岡子ども情報 Mi・kan」株式会社ふじやまママ発行
- 小林倫代(2006)。「科研費研究「障害乳幼児を抱えて就労している保護者に対する地域の特色を生かした教育的サポート」研究成果報告書, 19-20.
- 内閣府(2004) 少子化社会白書, (平成16年版 第二節) ぎょうせい
- 森上史朗(2008)。「よくわかる子育て支援・家族援助論〔第2版〕ミネルヴァ書房 pp. 190-192.
- 森田明美(2001)。「少子化時代の子どもへの育ち・子育て支援施策 都市問題研究, 53(6), 59-73.
- 佐々木綾子(2007)。「親準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.

吉岡亜希子 (2009). 子育て講座における父親の学習過程と意識変容——さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に——北海道大学大学院教育学研究院紀要, 107, 179-193.

Collaborative support program for child-raising between nursery school and university: Practical report of “Learn and Talk”

Hiromi Kai and Nozomi Notsuyama

Amidst the change of industrial structure and the progress of urbanization, people's life styles and gender-roles have significantly changed. Nuclear families, double income families, and single parent families have increased with the diversified needs for child-raising support. Especially, young parents eagerly seek for companions called “Mama-Tomo” or “Papa-Tomo” and more professional knowledge of child-raising. To respond to such needs, the staff of the members of the university and nursery school cooperatively provided the program where the participants could learn about child-raising and discuss with professionals and other parents. This paper reports the practice of this program and the perspectives of future subjects.

(指導教員 青野篤子)

